

日本とアフリカを結ぶもの

和崎春日（名古屋大学文学研究科教授）

日本アフリカ学会で、日本－アフリカ関係のシンポジウムを行った。このパネラー4人は、すべてアフリカ出身者である。ケニアのアゴラさん、カメルーンのサミュエルさん、コンゴ民主共和国（旧ザイール）のマスワナさん、マリのサコさん、というアフリカからやってきた留学生や元留学生たちが壇上を占め、日本人によるアフリカ認識をはじめ、それぞれの国と日本との関係について意見を述べた。2人いる司会でも、日本人の私は「付け足し」で、総合司会的な役割を果たしたのは、もう1人コンゴ民主共和国からやってきたサンガさんである。ガーナ出身のアジマンさんも、当初パネラーに名を連ねる予定だった。一緒にシンポジウムの準備をしてきた。かれらはみな日本語を共通言語に日本語で冗談を言いあって、プレゼンテーションの準備と意見交換を進めてきた。達者である。

このように、アフリカからの留学生が着実に育っている。日本で博士号をとり、日本の大学で教授や助教授のティーチング・スタッフとなって研究・教育に励んでいる人さえ出ている、ということだ。サコさんは京大で建築学の博士号をとり京都精華大学で教鞭をとっている。サンガさんは三重大で気候・環境学を、アジマンさんは岐阜大学で林学・農学を、教えている。アゴラさんも、名大で国際開発学の博士号をとりおえ、この秋から大阪の大学で開発経済学を教えることになる。岐阜大で教えているアジマンさんは、日本からの青年協力隊で数学を教えていた、現名大大学院生の廣瀬桂子さんの、ガーナの高校での教え子だという。縁が日本－アフリカを横断し往復し錯綜してきている。アフリカの人たちが日本を愛し、われわれがアフリカを愛するエネルギーが、交叉してきている。

私個人のアフリカ行きを振り返っても、日本－アフリカの交流から多く助けられたことが、思い浮かぶ。私は、木村大治さん（京大助教授）と佐々木重洋さん（富山大助教授）とともにナイロビ経由でカメルーンに入った。このとき、疲れきったわれわれをぶっそうな深夜の空港に迎えに来てくれていたのは、私が慶応大学の大学院で教えていた留学生チャオさんである。そして、このチャオさんは、日系企業であるカメルーン三菱商事に就職していた。また、カメルーンでマラリアの高熱にやられたとき、私を家に引き連れて世話してくれたのは、その前年、日本にアフリカ大学連盟の代表で来ていたヤウンデ大学学長のンダーさんであった。

このように、日本－アフリカの交流の歴史は、着実に深まり蓄積してきている、と思う。国単位や民族単位ではない、上に述べたような、一人一人の当地での生活経験のクロス・オーバーが、日本とアフリカを結ぶ堅実な関係を築き上げていくものと確信している。